

文化・経済フォーラム滋賀

第13号 (2025年12月)

第18回文化ビジネス塾（令和7年度ビジネス・カフェ in 文化産業交流会館との共催）を開催しました。

近江のまつりの今とこれから～地域文化と経済の好循環をめざして～

令和7年(2025年)11月3日(月・祝)14:00～16:00／滋賀県立文化産業交流会館 第一会議室

地域の「まつり」は、長い年月をかけて人々が築いてきた「文化の土壤」を象徴する、かけがえのない資源であり、地域のつながりやアイデンティティを育む大切な存在です。滋賀・近江は、かつて独自の資金循環システムによって豊かな文化が育まれ、「まつり」の宝庫と言われるほど多くの種類・数が地域で受け継がれてきました。しかし、近年は人口減少や生活様式の変化により、その継承の難しさが深刻化しています。

今年度は「近江のまつりの今とこれから」を提言研究のテーマとし、令和時代の近江のまつりを考えました。

基調講演 「近江のまつりの今とこれから」～アンケート結果を中心に～

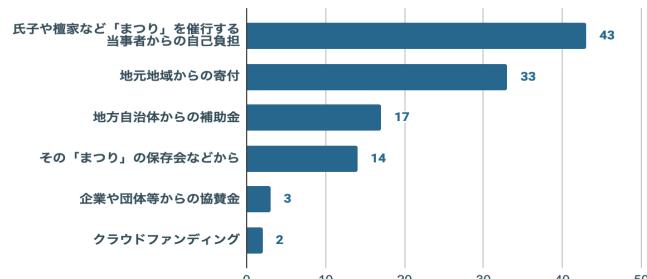
滋賀には、各地に多くの「まつり」が受け継がれていますが、その継承が大きな課題となっています。特にコロナ禍以降、いろいろなところで「このまつりをどうしていくか」という声を聞きます。フォーラムでは1年間を通じ、地域のまつりを文化と経済の両面から捉え、地域活性化や社会課題解決に向けて提案していくと議論を重ねてきました。2026年2月23日の総会では、「近江のまつりの今とこれから」というテーマで提言を発表します。祭りと一言で言っても、大きな祭りから村の鎮守の小さな祭り、また近江では地蔵盆という町内会単位のものもありますが、それも含めての「まつり」としています。

今年度は、7月9日に「都市のまつりの今とこれから」として大津祭、9月17日には「鎮守の神のまつりの今とこれから」として地域のまつりの現状と様々な問題点をテーマに、「文化経済サロン」（3ページ参照）を開催しました。これらを踏まえ、今年7月～8月に滋賀県内の祭り関係者を対象としたアンケート調査を、県内19市町の文化財担当、民俗担当の方を通じて実施し、103件の回答を得ました。

回答者は60代以上が半数を超える、自治会加入率の高い地域が多くありました。まつりの規模は50人未満が中心で、参加者確保は地域内の呼びかけが主流であり、SNS活用は少數でした。資金調達は自己負担や地域寄付が大半で、クラウドファンディングは限定的でした。

課題として最も多かったのは人手不足で、次いで役割や負担の集中、まつりの意義への理解不足が挙げされました。一方で、まつりを「地域の大切な行事で今後も続けるべきもの」と捉える回答が多数を占め、継続を望む意識は強いと思われます。自由記述からは、簡素化や負担軽減、時代に合わせた柔軟な変化、子ども・若者・女性の参加促進、新旧住民が関わる仕組みづくりへの期待が読み取れました。

「まつり」を催行する際に必要な資金をどのように得ていますか
(複数選択可)

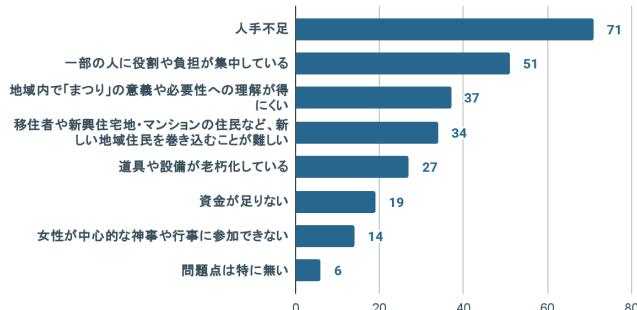


加藤 賢治 氏

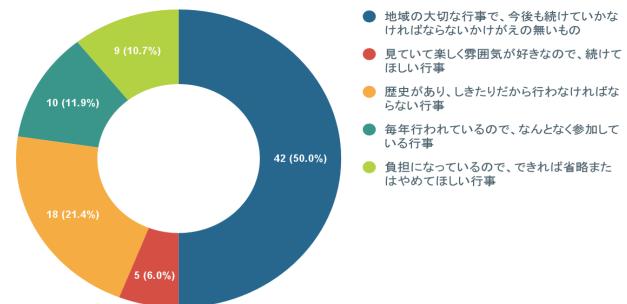
成安造形大学教授 副学長
文化・経済フォーラム滋賀 幹事



「まつり」を催行するにあたっての問題点を挙げてください
(複数選択可)



あなたにとって「まつり」はどのような行事ですか



また、保存会と自治会の関係、子ども会の消滅、コロナ禍後の地域交流の希薄化なども課題として挙がりましたが、服装やルールの緩和、外部ボランティアや業者の活用、QRコードによる参加募集など、各地で小さな創意工夫が進んでいることも明らかになりました。

まつりは、その原点として個人の記憶、誇り、感情に支えられており、地域のつながりを再生させる力があります。今後、まつりを継承していくためには、守るべき伝統とその時代に合った変化が必要であるのではないかと思います。まつりは、過去と現在、個人と地域、そして文化と社会を結び直す営みとして地域社会再生を象徴する存在であり、これらの知見をもとに、今後の提言につなげてまいります。

パネルディスカッション

「近江のまつりの今とこれから」



司会進行

高梨 純次 氏（公益財団法人秀明文化財団理事
文化・経済フォーラム滋賀幹事）

パネラー

加藤 賢治 氏

市川 秀之 氏（滋賀県立大学教授）

高橋 順之 氏（伊吹山文化資料館 学芸員）

対馬 佳菜子 氏（地域文化コーディネーター）

(写真) 左から高梨さん、対馬さん、市川さん、加藤さん、高橋さん

まつり継続へ多様な参加と世代間交流の仕組みづくりが課題

市川：アンケートの報告を伺い、一番の課題は人手不足で一部の人に負荷が集中、女性参加、新住民、いずれも人に関わる問題というのが非常に象徴的でした。まつりを続けて行く課題の一つは参加者であり、女性、新住民、外へ出て行つたがまつりだけに帰つてくる人、あるいは全くの他者、そういった人が継続的に参加することが重要です。まつりの重要性を認識するために一番良い方法は、ビデオの活用や報告書の作成など自分たちで調べることです。

これから地域社会の結びつきは、子どもと高齢者と環境だと思っています。子ども、お年寄りはどういうふうに関われるのか、そして関わることによって世代間の交流をどのようにしていくのかが一つの課題です。

太鼓踊りによる民俗芸能の継承のありかた

高橋：米原市上野の太鼓踊りは総勢141名です。この地域は集落が大きく、幸い子どもたちがたくさんいます。約3か月に及ぶ練習を指導してくれた指導者が太鼓踊りに対する思いを、「自分は太鼓踊りが好きだし、上野の子どもたちにも楽しんでほしい。」と言っています。岐阜県垂井町の表佐の太鼓踊りは、太鼓が大きい。これは隣の村に負けないように、だんだん大きくしてきたから。そういう切磋琢磨、隣に負けないみたいな部分も一つの民俗芸能が残っていくことかと思います。長浜市鍛冶屋町の太鼓踊りは、女性が加わり復活しました。15名の女性は、県立大の学生に太鼓を教えに来た地域外の人たちで、和太鼓の演者です。これは他所から来ている人たちが加わって民俗芸能をつないでいるという事例です。

記録と話し合いの積み重ねが、まつりを次につなぐ

対馬：コロナ禍の時に地元の方からまつりや行事を簡略化したとか辞めたとか、残念がられている声を聞きました。その中でよかったですなと思う話があります。平成の頃に改革した経緯をまとめたものがあると教えてくださいました。その中身は、まずオコナイとは何かという専門家の文章を調べてまとめたり、集落内でアンケートを取つたり、古考の方に由来や伝承を聞きに行つたりして、それをもとに当時の役員さんたちで、村で話し合つたことなどが書かれています。これまでも、時代に合わせて考えて改革してきたことを知って、次に進めると言っていたのをよく覚えています。

楽しいからこそ受け継がれる、開かれたまつりへ

加藤：皆さんのお話を聞いて、やっていて楽しいからこれを地域の子どもに伝えたい、そのことが次につながっていくと思いました。

高橋：太鼓踊りでは、大人と子どもに役割分担をしました。積極的に子どもにやらせて、太鼓踊りの全体を知つてもらうことで子どもが指導者になつていく。オコナイも子どもも繭玉を作つて一つの役割をしたり、そこで抽選会をしたり、子どもたちや女性たちを巻き込む工夫もされています。

加藤：民俗行事の中でも七五三とか子どもに関する年中行事は非常に多いと言えます。その点では子どもたちがこれからまつりのキーワードになってくるような気がします。

市川：多くの民俗行事が縮小するなか、地蔵盆と稚児行列、この2つだけが今盛んになりつつある行事だと言われています。他者の参加は、子どもがその契機になっていることが多いです。女性の参加についても、長浜のシャギリ（お囃子）の継承者がいないから中学校の先生に学校で教えてもらえないか依頼すると、「女性も参加できるのであれば学校でクラブを作つて教えますよ。」というところから、女性の参加が始まっています。

対馬：人手が足りないという理由で女性が駆り出されるのかという意見を聞いたことがあります。女性の参加と言つたときに、参加してほしい本当の理由は何なのか。集落の女性たちがまつりとどのような関わりをつくるか。女性たちとの話し合いが大事です。

まつりは記憶装置で実施することで刻み、同時に再生もしています。楽しさもです。地域が外向けに発信してくださると、新住民の方にとっても、直接関係ないけれど行ってもいいのかなと思えるような、一つの糸口になるのではないかでしょうか。

加藤：これから本格的な人口減少時代を迎えて、地域がどのように活性化し持続していくのかというのは大きな課題です。自分が住んでいる地域には必ずそこに歴史、伝承、伝説も含めてあり、その形として見えてくるものの一つが、まつりではないかと思います。

会場：まつりは、人の心のあり方、自然に対しての崇拜や自然の恵みに対して感謝をするということが原点ではないでしょうか。ですから、まつりは楽しくにぎやかにやるべきだと思っています。

(注) 敬称を省略して掲載させていただきます



文化経済サロン① 7月9日(水) 14:00~16:00 /びわ湖ホール研修室

近江のまつりの課題と展望①

都市のまつりの今とこれから 大津祭を対象に

大津祭の歴史と、経済力・工夫に支えられた継承の歩み

大津祭は、慶長年間に塙壳治兵衛が狸の面をかぶって踊ったことを起源とし、寛永15年（1638）に三つ車の山が作られて以降、約140年をかけて最大14基の曳山が整えられました。そして、港町・門前町・宿場町という性格を併せ持つ大津百町の経済力を背景に、海外の染織品や豪華な金具、精巧なからくり人形を備えた曳山祭として発展しました。

一方で、その維持と運営には多額の費用がかかり、江戸時代には不況や災害、人手不足により巡回を休止する年も少なくありませんでしたが、まつりが町全体の経済に寄与する存在であることから、周辺の町から催行の要望を受けることもありました。明治以降は大津の経済基盤の変化により、祭礼の催行が困難となり、曳山町だけでなく、氏子全体や市、商工会議所など外部の関与を模索するようになります。大正・昭和期には観光行事としての性格が強まり、補助金や宣伝、観覧席の設置、戦後の文化祭行事としての催行などを経て、曳山連盟や協賛会などの組織が整備されていきました。大津祭は、潤沢な資金を持った町衆が中心になったまつりですが、継続するために、時代に応じて資金調達や運営、関わる人々を変化させるなど、工夫を加えながら今日まで続いている。（木津）

今年12月、「大津祭の曳山行事」が、ユネスコ無形文化遺産に登録されることが正式に決定しました！

注）敬称を省略して掲載させていただきます

文化経済サロン② 9月17日(水) 14:00~16:00 /びわ湖ホール研修室

近江のまつりの課題と展望②

鎮守の神のまつりの今とこれから

この会の趣旨は、地方の人口減少に直面している地域において、中止されている祭礼や行事を元に戻すことが可能か、またその際にどのような課題があるかを考えることにあります。

中止された祭礼の復興

戦争によって中止されたまつりの例は多くあります。例えば長浜の曳山祭りは昭和12年（1937）に中止され、昭和24年（1949）に復活しました。その際、春祭に変更され、曳山の数も減らされるなど大きな変化がありました。同じように阿波踊りや大津祭も戦争で中止され、復興の過程で変化しています。また災害による中止の場合、東日本大震災後に祭礼を復興させた地域もあります。過疎化や高齢化によって中止になったまつりの例として六斎念仏があり、外部から参加者を募ることで復活した事例もあります。

ただし、復興が難しいまつりも存在します。花祭りのように国の指定文化財であっても中止され、復活に至らなかった例があります。復興されたまつりは、季節や参加者構成が変化していることが多く、外部参加者が継続的に関わることが成功の鍵となっています。

講師 | 木津 勝氏
大津市歴史博物館 副館長
船橋 寛明氏
大津祭曳山連盟 理事長



大津祭曳山の運営の現在

大津祭曳山は、上京町を含む13の町がそれぞれ特徴ある曳山を保有し、保存・巡回・運営には多くの人材と資金が必要です。一つの町を例にすると、上京町の月宮殿山では、曳山の巡回・保存、囃子の稽古・山建て用の町家や蔵の管理など町で負担しておりますが、巡回にかかる経費で年約300万円かかっています。曳山の修繕や文化財保護は専門委員や保存会が関わり、車輪・幕・からくり・懸装品など復元新調は数千万円単位になります。巡回では棟梁・山方・囃子方・警護方・曳き手ボランティアなど約80名が関わり、連盟を通じた県・市の補助金や寄付金などで運営しています。

大津祭曳山連盟は平成16年に法人化され、まつり運営、観覧席設営、展示館管理、観光案内やボランティア支援など幅広く事業を行っています。連盟の年間予算は約4,000万円です。

祭り運営には人手とお金、それと知識が不可欠で、曳山行事を安全で安心で楽しい行事にするというのが第一と思っています。そして、囃子や懸装品の保存を通して、地域の心意気を将来へつなぐことが課題となっています。400年続けていただいた先人たちに報いるためにも、皆さんの協力なくしてはできないと思っています。（船橋）

講師 | 市川秀之氏
滋賀県立大学教授



まつりの省力化と継続できる仕組みを

米原では、従来長期間かかっていた作業を短縮し、5年に1回の開催にするなどの工夫によって、まつりを継続しています。歴史民俗学の観点から見ると、まつりは時代に応じて改革され、継承してきたものであり、参加者や日程の変更、技術的対応もその一環です。

課題としては、人手不足、資金不足、そして新規参加者の確保が挙げられます。黒川太鼓踊りや若狭町の例では、データや諮詢委員会を活用した改革や保存会間の情報交換によって課題解決を図っています。長浜でも学生ボランティアの参加や女性の参画など、外部参加を促す工夫が行われています。氏子内の対応としては、「日程や祭式を変え、子どもが参加しやすい楽しい雰囲気にしていく。」「祭礼組織以外の参加者を集める。」「女性の参加、新住人を巻き込む。」「ボランティアや地域を離れていた地域外の人を巻き込む。」、そして一過性ではなく継続できる仕組みづくりが、今後必要だと思われます。

令和7年度 滋賀アートプラットフォーム事業 びわ湖・アーティスト・みんぐる2025 ((公財) びわ湖芸術文化財団地域創造部との共催)

音楽とアートでつづるおうみの民話 vol.2 ~大蟹伝説と祈り~

9月27日(土) @甲賀市碧水ホール (甲賀市)

甲賀市土山に伝わる民話「大蟹とお坊さん」を題材に、アーティストが子どもたちと民話の伝わる甲賀・土山の文化や暮らしをリサーチし、互いに交差しながら創作を深め、多様な表現が交ざり合うコンサートと展示会を開催した。

C³ vol.3 ~東洋と西洋の《闇》~

11月8日(土) @中川能舞台 (長浜市)

現代音楽×弦楽四重奏の切り口で滋賀の魅力を発信する演奏会。今回は作曲家の桑原ゆうさんに、長浜・湖北の観音信仰を背景に新曲を作曲いただき、弦楽四重奏と薩摩琵琶の編成で初演した。



第16回文化・経済フォーラム滋賀 総会・講演会

講演会
「湖国と秀吉・秀長」講師
長浜城歴史博物館館長
福井智英さん対談
「豊臣兄弟と近江」
NHK 大河ドラマ「豊臣兄弟！」制作統括

松川博敬さん

NHKキャスター
平田 惟さん演奏会
びわ湖ホール声楽アンサンブル
ソプラノ 萩原未和
メゾソプラノ 山際 きみ佳
テノール 蔦谷 明夫
バリトン 平 欣史
ピアノ 植松さやか

令和8年（2026年）

2月23日（月・祝）14時開演（13時30分開場）

会場 びわ湖ホール

入場無料

全席自由

事前の申し込みが必要です。
会員は1月21日(水)まで、一般に先行してお申し込みいただけます。
お申込み方法はウェブサイト、チラシをご覧ください。

日 程

14:00～16:30 会場：びわ湖ホール小ホール（地下1階）

びわ湖ホール声楽アンサンブル演奏会
「2025文化で滋賀を元気に！賞」表彰式
文化で滋賀を元気にする提言発表
講演会・対談17:00～17:20 会場：びわ湖ホール研修室（3階）
第16回文化・経済フォーラム滋賀 総会17:30～19:00 会場：びわ湖ホールラウンジ（2階）
交流会（会費：お一人様につき6,000円）

第16回総会を行います

日時：令和8年（2026年）2月23日（月・祝）

17:00～17:20

会場：びわ湖ホール研修室（3階）

議事

- ・令和7年度事業報告及び収支決算
- ・令和8年度事業計画及び収支予算

役員（幹事）=====

相談役 | 木村至宏、石丸正運、中村順一

代表幹事 | 山中隆

副代表幹事 | 田中健之、南千勢子

幹事 | 秋村洋、井伊亮子、井上建夫、加藤賢治、高梨純次、
中村守、西川忠雄、馬場章、保坂健二郎、松下茂生、
村田和彦、山本勝義、湯川雅史、竹村憲男

監事 | 波田晋一、村岡孝浩

令和8年度会員継続のお願い

文化・経済フォーラム滋賀は、「文化で滋賀を元気に！」を合言葉に発足以来、会員の皆さまのアイデアとネットワークを活かして滋賀の未来を考える事業に取り組んでいます。活動は、皆さまの会費で運営されています。1月は会員継続手続きの月です。ご案内を郵送させていただいておりますので、令和8年度におかれましても、ぜひとも引き続き会員をご継続いただき、「文化で滋賀を元気に！」する活動にご参画いただきますようお願い申し上げます。

年会費

個人・団体会員	一口 5,000円
法人会員	一口 20,000円

文化・経済フォーラム滋賀 第1回～第15回総会・講演会

<年> <総会> <講演会 講師・参加人数>

H23(2011)	1回	鷺田 清一	大阪大学総長	163人
H24(2012)	2回	大原謙一郎	大原美術館理事長	147人
H25(2013)	3回	蓑 豊	兵庫県立美術館館長	230人
H26(2014)	4回	田村 孝子	グランシップ館長	107人
H27(2015)	5回	姫野カオルコ	150回直木賞作家	307人
H28(2016)	6回	山極 壽一	京都大学総長	253人
H29(2017)	7回	津田 和明	サントリー元副社長	113人
H30(2018)	8回	小林 徹	オプテックス会長	117人
R 1(2019)	9回	北川フラン	アートディレクター	123人
R 2(2020)	10回	澤田 康彦	前「暮しの手帖」編集長	177人
R 3(2021)	11回	養老 孟司	東京大学名誉教授	677人
R 4(2022)	12回	隈 研吾	建築家・東京大学特別教授	239人
R 5(2023)	13回	今森 光彦	写真家	198人
R 6(2024)	14回	小泉 武夫	東京農業大学名誉教授	257人
R 7(2025)	15回	バイマーヤンジン	歌手	133人

注：敬称を省略して掲載させていただきます

<提言タイトル>

H24(2012)	文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を
H25(2013)	文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ
H26(2014)	滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した開催へ
H27(2015)	自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を ～“近江遺産” “近江八百八景” から日本遺産そして世界遺産へ～
H28(2016)	新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ
H29(2017)	世界遺産・無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを ～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～
H30(2018)	地域文化を育む、新たな観光を創造する
R 1(2019)	アーティストと地域をつなぎ、新たな文化を育む
R 2(2020)	文化で滋賀を元気に！多様な人材を育む地域活動の推進
R 3(2021)	アートを地域のプラットフォームに ～文化と経済の連携を深める新しい視点の研究～
R 4(2022)	創造の現場に若い世代の活躍の場をつくり、地域の原動力に
R 5(2023)	博物館は地域社会に貢献できるのか ～近江国の文化財をどのように継承し活用するか、博物館の使命とは～
R 6(2024)	地域拠点「劇場・文化ホール」 ～多様な人材の活躍が地域を変える、未来を創る～
R 7(2025)	公共建築を次世代に引き継ぐ～建築文化の振興をめざして～